

報告Ⅱ

スリランカ仏教におけるオルコットの業績

近畿大学文芸学部教授
西尾秀生

はじめに

アメリカ合衆国出身のヘンリー・スチール・オルコット (Henry Steel Olcott, 1832-1907) は、19世紀後半の仏教界に最も大きな影響を与えた西洋人といえるだろう。彼の人生の前半はアメリカでの農学者、軍人そして弁護士という比較的順調な経歴であったが、1874年にブラヴァッキー (Helena P. Blavatski, 1831-1891) に会ったことで人生の転機が訪れた。1875年にオルコットはブラヴァッキーと共に神智学協会を創設し、初代会長になった。1879年に神智学協会の本部をインドに移したことから、オルコットとブラヴァッキーは翌年にスリランカへ行ったが、オルコットだけが仏教復興運動に深く関ることになった。今回はオルコットのスリランカでの業績と現代的な意義を考えてみよう。

1. 仏教とキリスト教の論争

どの宗教も受け入れるという神智学協会をプロテスタントが多数派であるアメリカで設立したので、オルコットとブラヴァッキーは当然のことではあるがアメリカ社会から激しい非難を浴びた。このように苦しい立場にいた二人を喜ばせる知らせがあった。それはスリランカで行われた仏教徒とキリスト教徒の論争で仏教側が勝利したというものであり、この勝利がオルコットとスリランカを結び付ける契機となった。

スリランカでの仏教徒とキリスト教徒の論争は、キリスト教側の牧師からの申し入れで、1866年に始まり、合計5回行われた。最後の論争は、1873年にパーナドゥラで僧侶グナーナンダ (Migettuwatte Gunananda) と牧師シルヴァ (David D. Silva) との間で互いの聖典の矛盾点を攻撃する形で行われた。結果は学僧であるグナーナンダの巧みな議論により、仏教側の勝利を印象づけた。キリスト教に対する仏教の勝利をスリランカの仏教徒が喜んだのは当然である。

この宗教論争の資料を読んでも、なぜ仏教側が勝利したか容易に判断できる。牧師はキリスト教が優れた宗教であり、仏教に負けることはないと考えていたけれども、グナーナンダは上座仏教の教理に詳しい学僧であり、論争も得意であった。一方、キリスト教側のシルヴァは仏教の知識に乏しく、縁起説のような基本的な教理さえも充分には理解できていなかった。それに対して、グナーナンダは全知全能とされるキリスト教の神が生贄を求める非人道的な神であることを『旧約聖書』の「創世記」から主張して、神エホバの欠点を鋭く突くことができた。この二人の論争者の学識にはかなりの差があったことは明らかである。

この論争の内容がスリランカの新聞に載り、たまたま当時スリランカを旅行中であったアメリカ人のピーブルズ (J.M.Peebles) が論争の英文の報告書を入手し、後にそれをアメリカで出版した。オルコットとブラヴァッキーは、その報告書を読んでパーナドゥラでの仏教側の勝利に感動し、1875年にグナーナンダに手紙を出した。その中でオルコットとブラヴァッキーは、グナーナンダの勝利を称え、「私達は仏教徒であり、スリランカへ行きたい。」と書いている。この手紙からオルコットがすでに仏教徒になっていたことが分かる。グナーナンダも白人の仏教徒からの手紙に喜んだ。このようなことから、両者の間で文通が始まった。1877年にブラヴァッキーは著書*Isis Unveiled*を出版し、それをグナーナンダに贈った。グナーナンダはその本を仲間の僧侶とシンハリ語に翻訳してスリランカで出版した。

2. スリランカ来島と受戒

オルコットとブラヴァッキーが1879年にインドのボンベイに来たことを知ったグナーナンダは、何度も手紙を出して熱心にスリランカに来るように勧めた。そこでオルコットとブラヴァッキーは神智学協会の一行と共にスリランカに向かい、1880年5月16日にコロomboに入港し、グナーナンダや他の仏教徒達に迎えられた。ブラヴァッキーの著書*Isis Unveiled*は、すでにシンハリ語で出版されていたので、ブラヴァッキーはスリランカではよく知られていた。オルコットとブラヴァッキーはグナーナンダと相談してゴールで受戒することにした。翌日、彼らの船がゴールに着くと多くの仏教徒に熱狂的に一行を迎えた。5月25日にオルコットとブラヴァッキーはヴィジャヤナンダ寺院でブラットガマ (Bulatgama) から五戒を受けて近代の西洋人として正式に最初の仏教徒になった。この受戒はイギリスに支配されていたスリランカの仏教徒に勇気を与えただけでなく、オルコットが仏教復興運動にのめり込む契機ともなった。

このゴールのヴィジャヤナンダ寺院には、二人が受戒している場面を描いた絵 (図1) があり、ここで受戒したというオルコットの自筆の証明書の写し (図2) もある。ちなみにオルコットの自筆の原本は政府が保管している。また講堂にはオルコットに胸像と立像 (図3) がある。

3. 仏教神智学協会

オルコットとブラヴァッキーが初めてスリランカを訪れた1880年5月には、キリスト教の学校は805校もあったのに、仏教の学校は4校しかなかった。その理由は植民地政府が毎朝1時間目に聖書を教える学校にしか補助金を出さなかったからである。仏教の学校は設立を禁止されていた訳ではないけれども、実際には経営が困難であった。近くに仏教の学校がないため、殆どの仏教徒の子供達は、仕方なく聖書を教えるキリスト教の学校に通い、改宗を余儀なくされていた。その事実を知ったオルコットは、仏教徒の学校を創る資金集めのために、1880年6月にコロomboに仏教神智学協会 (Buddhist Theosophical Society) を設立した。その後スリランカの各地に仏教神智学協会の支部を創り、英語とシンハリ語で仏教の機関誌を出した。この仏教神智学協会の設立時に、

コロンボで開催されたオルコットの講演を聞いた15歳の少年デイヴィッド (Don David Hewavitarne, 1864-1933) は深い感銘を受け、後にダルマパーラ (Anagarika Dharmapala) として仏教復興運動に携わることとなる。

この協会は現在でも1880年当時とほぼ同じ場所にある。オルコットが使っていた建物のすぐ横に現在の建物があり、その上が仏舎利塔になっている。コロンボ・フォート駅に近いオルコット通りに面しており、現在でも貧しい仏教徒の子ども達のために募金活動を行っている。

4. 仏教日曜学校

オルコットは、キリスト教の日曜学校を真似て、1881年2月にコロンボで最初の仏教日曜学校を設立した。同様にスリランカのほとんどの寺院に日曜学校を付設した。これは、オルコットが先ず資金がなくてもできる学校を設立したのであった。最初に設立した仏教日曜学校は、1886年に平日に通う仏教学校になり、さらに1895年にアーナンダ・カレッジとなった。初代の学院長は神智学協会の有力な会員であったレッドビーター (C.W. Leadbeater) である。他の仏教日曜学校からも仏教学校になったものもある。

現在でもスリランカでは寺院に仏教日曜学校が併設されている。教員は僧侶でなくても仏教に詳しい人であればよいので、多くの場合は一般の人がボランティアで教えている。スリランカでは、大学入学までに5歳から13年間学校に通う制度である。仏教日曜学校では、やはり13年間も毎日曜日の午前中の4時間も仏教を学ぶのである。勿論、この学校で学ぶのは希望者だけであるが、この仏教日曜学校の課程を終えて、最終試験の合格者は仏教に精通した在俗信者として社会から高く評価されている。けれども、コロンボのような都会では、大学進学のための共通試験の受験勉強が熾烈になり、仏教日曜学校に通う生徒は半数を割っている。

5. 仏教学校

1881年に仏教学校設立の資金を集めるために、オルコットは仏教神智学協会の会員達と相談して、入場料を取ってオルコットの講演会を開催することを決めた。その後、スリランカ各地で有料の講演会を行った。特に1886年にはダルマパーラを通訳として、レッド・ビーターと共に牛車で2ヶ月かけてスリランカ全島を回るオルコットの講演会が行われた。仏教を擁護するために、辺鄙な村々までやってきた白人の仏教徒オルコットは、村人達に熱狂的に歓迎された。各地の講演会は大盛況であったので、オルコットは仏教学校設立の資金を集め、次々と仏教学校を設立した。すでに述べたアーナンダ・カレッジに続いて、サンガミッター・カレッジやマヒンダ・カレッジ、ナーランダ・カレッジ、ダルマラージャ・カレッジなどを設立した。

オルコットがスリランカに来る前には、4校しかなかった仏教学校がオルコットの亡くなった1907年には208校になっていた。多くの仏教学校が設立されたことは、仏教教育の普及だけでなく、子供達がキリスト教徒に改宗しなくなったことを意味する

ので、仏教徒のシンハラ人達にとってはとても意義のあることであった。これらの仏教学校は1962年に政府に引き継がれて公立学校となった。

6. 仏教書の出版

オルコットは必要に迫られてスリランカで数冊の仏教書を出版することになった。先ず1881年に仏教日曜学校を創ると、そこでの教科書にするために*The Buddhist Catechism*を出版した。これはキリスト教の問答式入門書を真似たものである。この本はすぐにシンハリ語に訳された。この序文で、スリランカのヴィディヨーダヤ大学の学長であった高僧スマンガラが「正しい仏教の教えである。」と保証しているので、オルコットが上座仏教の教理にも詳しく分かったことが分かる。この本は質問形式で仏教を説明しているので、仏教の入門書であり、仏教日曜学校で子供達に仏教を教えるのに適していた。この本が各国で23ヶ国語に翻訳されて出版された事実から、他の国では成人の仏教の入門書でもあったし、オルコットはスリランカ以外でも仏教思想を普及させたと言えるだろう。我が国では今立吐酔訳『仏教問答』（仏書出版会）として1888年に出版されている。

1887年に、オルコットはスリランカの人々に仏教の倫理を再認識させるために*The Golden Rules of Buddhism*を出版した。この本は仏教経典から倫理を説いたものである。パーリ語の経典である*Suttanipata*からは不殺生、不盗、不淫、不妄語、不飲酒の五戒などを引用している。同様に*Dhammapada*からは恨みを捨てることや怒りを克服することなどを引用している。さらに*Singalovadasuttanta*からは世俗的人倫関係の理想的なあり方を説明している。この本では圧倒的に原始仏教からの引用が多いが、中国仏教からも僅かではあるが説明している。オルコットがこの本の題名に「黄金律 (the golden rules)」と付けたのには理由がある。キリスト教徒が普遍的な倫理とする「黄金律」は、『新約聖書』の「マタイ書」に出てくる「あなたがして欲しいことを他の人にしなさい。」という内容を指す。これに対してオルコットは、仏教にもキリスト教に劣らない普遍的な倫理が説かれているとして、この本を出版したのである。この本では、仏教の倫理として*Suttanipata* 394の不殺生を最初に述べている。不殺生戒は「殺してはならない。殺させてはならない。」と説かれるが、その背後には「自分がされたいやなことは人にしてはならない。」というインドの倫理の基準がある。オルコットは仏教の不殺生がキリスト教の黄金律として知られている内容に相当すると考えていたことが分かる。

7. 仏教徒戸籍係の設置とウェーサーカ祭の祝日化

当時のスリランカでは、キリスト教徒用の戸籍係しかなく、教会で結婚式を挙げた者しか正式に夫婦として戸籍に登録できなかった。オルコットはスリランカのゴードン総督に会って仏教徒の法的差別撤回を訴えた。けれどもスリランカでは問題が解決しないので、オルコットはスリランカの仏教徒の代表として1884年4月にロンドンに行き、仏教徒戸籍係の設置を認めさせた。

またこの時に、信仰と祭の自由を強く主張して、スリランカでは最も大切な祭りであ

るウェーサーカ祭 (vesaka) も祝日として認めさせた。それまでのクリスマスのみが祝日という不平等を解消させた。スリランカでは1885年のウェーサーカ祭から祝日として祝われることとなった。またオルコットはウェーサーカ・カードも考え出し、スリランカではこのカードを送る習慣も定着した。勿論、この習慣はクリスマス・カードからヒントを得たものである。

8. 仏旗の制定

1885年4月にオルコットと仏教神智学協会の会員達はあらゆる仏教国でシンボルとして使えるものが必要と考えて相談し、仏旗を思いついた。この旗に用いられた5色はゴータマ・ブッダがブッダガヤで悟りを開いたときに身体から発した5色である。旗の色は左から順に青・黄・赤・白・橙と縦に5列であるが、最後の6列目は5色が縞模様になっている。この仏旗は翌年のウェーサーカ祭で初めて使われた。この旗は1950年にスリランカで開催された世界仏教連盟の第一回世界仏教会議で正式に国際仏旗として認められた。これもオルコットがキリスト教の十字架のようなシンボルに相当するものを望んだことから作られたものである。

9. 大菩提会の募金活動

オルコットはダルマパーラが設立した大菩提会の募金活動のため1892年11月にミャンマーを訪問した。さらに大菩提会を援助するため1893年1月から3月までカルカッタとサールナートを訪れて経済的な援助をした。

おわりに

現在でも、オルコットはスリランカで仏教復興運動の英雄として尊敬されている。もう一人の英雄であるダルマパーラは、オルコットの影響により仏教復興運動を始め、大菩提会を創設したのであるから、スリランカ仏教におけるオルコットの業績は大きいというべきであろう。

またオルコットの切手が発行されているし、コロンボ・フォート駅前の大通りは「オルコット通り」と名づけられていて、駅前には彼の銅像(図4)が立っている。さらにオルコットが設立したアーナンダ・カレッジなどでは今でも彼の銅像(図5)が安置されており、写真も飾られている。彼が設立した最初の学校があった建物(図6)は、スリランカ政府が貴重な遺産として保存している。

スリランカ仏教におけるオルコットの業績は第一に仏教徒の学校教育を考えるべきであろう。彼が多くの仏教学校を設立したことにより、仏教徒の子供達がキリスト教に改宗しなくなったからである。スリランカの国勢調査によると、1881年には仏教徒は61.5%であったが、1891年には62.4%になっている。この1881年はオルコットが最初の仏教日曜学校を始めた年であり、10年間で仏教徒が0.9%回復したことになる。スリランカが仏教国として存続できたのはオルコットの業績が大きいといえるだろう。

1. Primary Sources

(1) Publications by Henry Steel Olcott

The Buddhist Catechism. Madras: Theosophical Publishing House, 1927 [1881].

The Golden Rules of Buddhism. Madras: Theosophical Publishing House, 1984 [1887].

Old Diary Leaves: The History of the Theosophical Society. 6 vols., Madras: Theosophical Publishing House, 1974-75 [1895-1935].

“Religion in the Ceylon Census.” Madras: *Theosophist*, October, 1892.

(2) Other Primary Sources

Blavatsky, Helena Petrovna. *Isis Unveiled: A Master Key to the Mysteries of Ancient and Modern Science and Theology*, 2 vols, Pasadena: Theosophical University Press, 1960 [1877].

Ranson, Josephine, ed. *A Short History of the Theosophical Society, 1875-1937*. Madras: Theosophical Publishing House, 1938.

2. Secondary Sources

Agarwal, C.W. *The Buddhist and the Theosophical Movements*. Sarnath: Maha Bodhi Society, 1993.

Agarwal, H.N. *Reminiscences of Colonel H.S. Olcott by Various Writers*. Madras: Theosophical Publishing House, 1932.

Bond, George D. *The Buddhist Revival in Sri Lanka: Religious Tradition, Reinterpretation and Response*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1992 [1988]

Fields, Rick. *How the Swans Came to the Lake: Narrative History of Buddhism in America*. Boston & London: Shambhala, 1986[1981].

Gombrich, Richard and Gananath Obeyesekere. *Buddhism Transformed: Religious Change in Sri Lanka*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1990 [1988]

Kirthighe, Buddhadasa P. *Colonel Olcott: His Service to Buddhism*. Kandy: Buddhist Publication Society, 1981.

Muphet, Howard. *Yankee Beacon of Buddhist Light*. Wheaton, Madras & London: Theosophical Publishing House, 1988[1972]

Prothero, Stephen. *The White Buddhist: The Asian Odyssey of Henry Steel Olcott*. Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press, 1996.

中村元監修、金漢益訳注『キリスト教か仏教か』山喜房佛書林、1995年。

前田恵學編『現代スリランカの上座部仏教』山喜房佛書林、1986年



图 1



图 3

This is to Certify that
 on the 19th May 1880 the Founders of the
 Theosophical Society
 Madame H. P. Blavatsky and myself took the
 Pancha Sila for the first time at Vidyaramba Vihara
 from Atkumana Dhammarama Thera
 Henry S. Olcott
 P.T.S.

图 2



图 4



图 5



图 6